

- 1 母上や大きい姉達は京の家に留めおかれた
 - 2 それぞれの地位にあった兄達も謫され、遠くへと流され京を去って行った。
 - 3 幼い男の子と女の子のお前達は私とともに西へ下ってきた。
 - 4 (今) その子供達と私は起居を共にし、またともに語り合えている。
 - 5 昼、食事をするときも、いつもお前達の前に父の私がいるし、
 - 6 日が暮れて宿で寝る時にもいつもお前達と父の私は一緒である。
 - 7 夜の暗さにも、ともし火があつて怖くはないだろうし、
 - 8 寒い夜にも(その寒さを防ぐくらい) 衣服はお前たちにあてがわれている。
 - 9 過ぎし年(先年)、私は暮らしに困っている子を京で見ることがある。
 - 10 京の街中をさまよっていたが、きっとよるべきところの家をなくしたのだろう。
 - 11 裸身で賭博をする者を
 - 12 道行く人は、南助と呼んでいた。
- 《大納言南淵(年名)殿の子、内蔵助(良臣)は、(身を持ち崩して)博打打ちとなった。(零落したとはいえ)今でも「南助(内蔵助の南淵君)とあだ名される。》
- 13 素足で琴を弾く女を、
 - 14 巷では、弁御と呼んでいた。